



## 徳島城跡と徳島城下町跡

国指定史跡

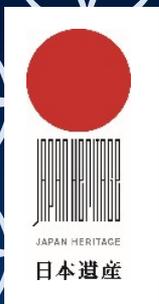
徳島城は天正 13 年 (1585)、阿波国の領主となる蜂須賀家政によって築かれ、藩政時代を通して徳島藩の政治拠点でした。

徳島藩は江戸時代中期以降、藍の栽培を保護・奨励し、収穫された藍は徳島城下に集積され、城下町船場が藍商人の活動拠点となりました。

藍の製造と販売に徳島藩が積極的に関わることで徳島城下町は発展し、明治 22 年 (1889) の市制施行時の人口は全国第 10 位でした。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



# 阿波藍製造技術

国選定保存技術

古くから染料として広く使用されてきた藍は、歴史上の染織作品にも使用例が多く、その修復や伝統染織技術にとって欠かすことのできないものです。そのため、阿波藍の発達した加工技術は、昭和53年（1978）に国の選定保存技術に認定されました。

良質な藍染料「菘（すくも）」の入手が難しくなっている今日、保存会は菘製造の技術を守り、伝統技術の継承と後継者育成に取り組んでいます。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



# 阿波木偶「<sup>さんばそう</sup>三番叟まわし」

県指定無形民俗文化財

阿波木偶「三番叟まわし」は、二つの木箱に千載・翁・三番叟・えびすの四体の木偶を入れて、人形遣いと鼓打ちの二人が一組になって行う門付け芸です。

葉藍の収穫量や染（すくも）の品質は藍商の収入に直結するものです。そのため、藍屋敷では上質な染ができることを願い、染を生産する寝床で三番叟祈禱を行っています。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



# ちゅうせん 阿波藍の 注染

県指定無形文化財（工芸技術）

注染とは、糊を使って部分的に染色を防ぐ糊防染法の一つです。布の上に型を置き、その上に糊を塗った後、染液を注ぎいれます。

紺屋古庄の藍建ては化学薬品を用いず、緩衝性のある天然の素材を使用する伝統的な発酵建てです。白と藍色の鮮やかな対比と、段落ちの豊かさが特徴で、深く温かみのある風合いを持っています。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



## 阿波おどり

藍商人たちは、富を得るだけではなく、全国各地との文化交流の担い手ともなりました。

そのような中で発展を遂げた「阿波おどり」には、全国各地の様々な要素が取り入れられています。沖縄の「カチャーシー」や九州の「ハイヤ節」、広島島の「ヤッサ節」などにも共通点が見られ、そこからは全国に雄飛した阿波の藍商人の姿を感じることができます。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～

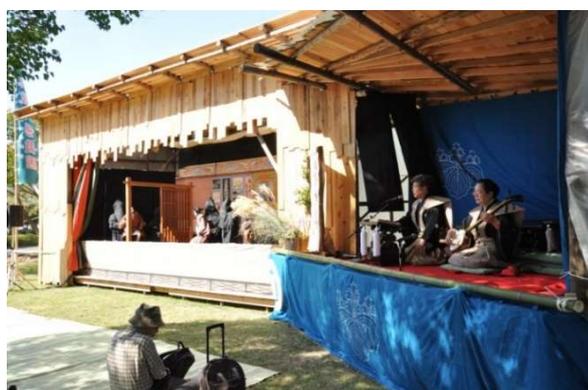


# 阿波人形浄瑠璃

国指定重要無形民俗文化財

人形浄瑠璃は、物語の進行と登場人物の台詞を語る義太夫節と、語りの伴奏となる三味線、物語の進行に合わせて操られる人形との三者が一体となった芸能です。

庶民の娯楽として人気が高く、農村舞台や小屋掛けによる人形浄瑠璃の興行も頻繁に行われています。そして、江戸時代にこれらの興行に資金を提供したのが、阿波藍により財を成した藍商です。



藍のふるさと阿波～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～



## 東黒田のうつむき地蔵

吉野川中下流域では、台座を高くした地蔵座像を各地で見ることができます。数ある高地蔵の中でも東黒田のうつむき地蔵は、台座の高さが2 m以上ある巨大なものです。

また、東黒田地区は江戸時代、県内屈指の葉藍の生産地域でした。造立にあたり地元の豪農である長條（ちょうじょう）孫太郎が資金を提供したといわれ、江戸時代後期の藍栽培による地域の経済的・社会的繁栄の歴史を象徴する文化遺産として大変貴重です。



